
三人の天の御遣い・改

S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三人の天の御遣い・改

【Nコード】

N4104X

【作者名】

S

【あらすじ】

事故に巻き込まれ外史に飛ばされた
せせらぎ終夜、古城矢吹、そして北郷一乃。
この三人は外史でどの様に生きるのか。
そして彼等は乱世を治めることが出来るのか？
イレギュラーの二人を巻き込んだ外史が今始まる。

一話 序章（前書き）

こんにちわゝ

再挑戦です。

やっぱり少し設定を変えます。

何と言つかまあ、変えたのは色々です。

何と言うかもしかしたら前作の『真・恋姫？無双三人の天の御遣い』とは

全くの別作品になるかもしれませんがよろしく願います。

では、始まりゝ

一話 序章

ある三人の少年が道を歩いている。

「なあ、一刀」

ある一人の少年に話しかける。

その少年の名は『古城矢吹』。

三人の中でも最も正直で最も義理人情に厚い少年と言えるだろう。

「何だ？矢吹」

矢吹に話し掛けられた少年は『北郷一刀』。

三人の中では最も優しいが『悪』と言う人種には全く容赦しない少年。

「何で俺達って彼女が居ないんだろうな」

「お前はバカか？何故そんなに欲望に正直なんだ」

そう呆れた表情で言ったのは『潺終夜』。

三人の中で最も冷静で現実主義者。

「終夜は現実主義過ぎんだよ」
「もっと、夢を見ようぜ」

「バカか……夢を見過ぎるといつか失望するぞ」

終夜はそう冷たく言い放っているが別に矢吹のことが嫌いな訳では

ない。

むしろ親友として信頼している。

「失望しても良いから夢見たいんだよ!。」

いつか、女の子だらけの島に漂流したいんだよ!。」

「「はあ……………」」

その言葉に二人は呆れて溜め息をつく。

そのまま二人は矢吹をおいて歩いて行く。

それを見た矢吹は慌てて走って二人に追いつく。

「しかし………… 矢吹の言うことも確かか…………」

「「え?」」

終夜が今まで矢吹の言うことに賛同したことは無い。

なのに今賛同したことに二人は驚いている。

「矢吹の言う通りかもしれん…………」

こんな退屈な人生を俺達は送って死んでいくんだからな、夢を見ていた方が人生は

楽しいかもしれん」

「「……………」」

終夜の言ったことに二人共賛同しているらしい。

俯いて黙ってしまった。

「二人共そろそろ行くぞ。」

帰りが遅くなると不味い」

「「ああ」」

二人がそう返事したのを聞いて終夜は歩き始める。
すると……

「その三人！危ないぞーーーー！」

「「「え？」」」

ドゴオオオオッン！

そんな轟音が響き渡り三人の居た所に鉄骨が落ちた……

一話 序章（後書き）

始まりは大体こんな感じです。

駄文ですがこれからよろしくお願いします。

では、また次回。

二話 それぞれの道へ（一刀編）（前書き）

こんにちわ

まあ、まずは本編の主人公の一刀から行ってみましょう。

主人公二人の を変えました。

では、始まり

二話 それぞれの道へ（一刀編）

一体どうなったんだ？

俺は矢吹や終夜と一緒に歩いてて……

それで……と言いかまず、何で俺の目の前が真っ暗なのかが疑問だ。

あ、目を瞑ってるからか……

そんなことに気付かないなんてな。

取りあえず目を開けるか。

俺はそう思い目を開けてみる。

すると……

「何と言っことでしょう」

なんてギャグを言うほど俺は余裕がある訳無い。

俺の目の前には日本なんて言う国の面影は無い。

もしかして……

「タイムトラベルか？」

俺は思い当たる言葉を呟いてみる。

この前テレビでやっていたがタイムトラベルは絶対に無いとは言い切れないらしい。

過去にはいくつかの例があり突然行方をくらませた者が未来に起きることを言い当てたなんて例もある。

「はあ〜どうやったら元の世界に戻るのかなあ……」

はつきり言って元の世界に戻る自信が無い……

「これからどうすれば良いんだよ……」

俺はそう言いながら空を見る。
空には雲がある。

雲は俺に起こったことは極小さなことだと言っ様に空を泳いでいた。

「『生きている限り無意味なことなんて無い』か……
師匠、今、俺に起こってることも意味はあるんですか？」

俺は空に向かって一人呟いた。
でも、その質問に答えてくれる人なんて居る訳が無い。

「じつとしててもしょうがないな。
歩くか……ん？これは……」

近くにあったのは俺の愛刀『瓶割刀』

「何でこんな所に……確か本家に保管されてるんじゃないか？」
俺はそう呟きながら瓶割刀を拾う。
すると

「おい、兄ちゃん！珍しい服を着てるじゃねえか！」

「は、早くその服を渡すんだな」

「早くしな！」

声のする方を振り向いてみるとそこには昔風の服を着た男三人が居た。

「（やっぱりタイムトラベルか）
悪いけどこの服を渡す訳にはいかないんだ。
それでも無理矢理この服を奪おうって思うんなら……」

俺は自分の相棒である瓶割刀を抜いた。

瓶割刀は戦国時代初期の一刀流の始祖、伊藤一刀斎の愛刀。
一刀流から様々な流派が派生したらしいが俺が祖父から受け継いで
師匠の下で昇華させた流派はどんな歴史書にも載っていない流派『
不活一刀流』。

その流派の真髄は至極単純。

敵は必ず活かさずに抹殺すること。

そして、俺は今警告している。

『俺の敵になりたく無ければ今すぐ去れ』と。

「ふざけるな！やっちまえ！」

「「おう！」」

残念だ……

あまり人は殺したくないんだがな……
すると

「待てい！」

その声のした方を見ると一人の少女が居た。
その少女はこちらに来て盗賊達の前に立ちふさがった。

「何もんだ！」

「一人の少年を三人掛りで襲う様な外道に名乗る名は無い！」

少女はそう言つて三人の盗賊達に襲い掛る。

なかなかの連撃だな……

だが、まだまだ……

「お前等逃げるぞ！」

盗賊達の頭領らしい男はそう叫んで逃げて行つた。

「待て！」

少女は盗賊達を逃がす気が無いらしい。

追いかけていく。

「大丈夫ですか？」

「え？」

そんな呑気な声を聞いて声のする方を向くとそこには頭に人形（？）を乗せた少女が居た。

「この辺りは盗賊が比較的少ない地域なのですが……
運が悪かったですね」

一応話しを合わせた方が良くと思い話を始める。

「ああ、全くだ……」

それよりここどこだ？俺は旅人でこの大陸には来たばかりなんだが」

「旅人さんですか。ここは陳留の郊外です」

陳留？確か魏の領土だったような……

あゝ三国志の時代にタイムスリップしたのか……

一番来たく無い時代だな……

「そうか……それと序で聞くけどこっちでやっちゃいけないことってあるか？」

「あります」

そう言ったのは眼鏡をかけたしっかりしていそうな少女。

「他人を認められても無いのに真名で呼ぶことです。

真名と言うのはとても神聖な名でその人の生き様を示す物です。

もし、真名を認められて無いのに呼んだら……首を刎ねられても仕方ありません」

「おいおい……物騒だな……」

まあ、こっちではそれが当たり前なんだな？」

真名つてもしかして『誓名』と同じようなものかな？

でも誓名を知ってる人なんてそうは居ないだろうなあ……

「その通り」

先程盗賊達を追っていた少女が戻って来た。

「さっきは助けてくれたありがとう」

「いえ、本当なら助けが要らないと顔に書いてありましたが厄介事に手を出すのが面白くて」

「……なんて面倒な性格」

「ははははっ！ 良く言われます！」

分かってるなら治せよ……

「それより美しい得物ですな。
何と言う物ですかな？」

「ああ、刀って言ってな。
名は瓶割刀って言うんだ」

「瓶割刀ですか？
瓶でも割れるのですか？」

「ああ、何でもある家の瓶に隠れていた賊を瓶ごと真っ二つにして
そう呼ばれたらしい」

そう言いながら俺は瓶割刀を鞘にしまう。

「ほう……」

あ、やばい……

何か地雷踏んだ様な気がする……

「そ、それより！ 君達の名前を聞かせてくれ。
ずっと『君』じゃ何かさ」

「そうですね。」

我が性は『趙』名は『雲』字は『子龍』」

おいおい……嘘だろ？

あの趙子龍だと？

まじかよ……

「私は戲志才と名乗っておきましょう」

『名乗っておきましょう』って偽名かよ……

「私の性は『程』名は『？』字は『仲徳』です」

祖父さん……俺は今とんでもない所に来ている……

あの有名な三人が女の人になってます……

何この状況……

まじありえないんですけど……

おっと！俺も名乗らないとな。

「俺は北郷一刀。」

この大陸の人の名前とは少し違う所があるけどそれが俺の名前だよ」

「それより北郷殿」

「ん？」

「私と手合わせ願いたい」

騙せなかったか……

しょうがない……

「そっちの得物が折れるかもしれないけど良いかい？」

「良いでしょう」

自信満々な顔だな

俺無傷で済むかな……

「星ちゃん、官軍です」

程？がそう言つてとある方向を指す。

その方向には馬に乗り鎧を着た者達が居た。

「うむ……北郷殿残念だが手合わせはまた今度。

官軍が絡むと面白いことも詰まらないことになるのでな」

「さようなら」

「また今度」

三人はそう言つてその場から立ち去った。

俺はそれを呆然と見てて……

俺はそれを追え無くて……

そして、その場に残ってしまった。

そして、瞬く間に軍に囲まれてしまった。

俺は一応瓶割刀に手をかける。

「華琳様！こ奴は……」

「違うわね……目撃情報と一致しないわ」

「ならばこの者は何者でしょう？」

何だか俺抜きで話しが進んでるな……
はあ……

「あなた、何者？」

「俺は北郷一刀。」

まあ、色々あつてこの大陸に来た者だよ」

「貴様！華琳様に向かってその口の利き方は何事だ！」

そう言いながら黒髪の少女は俺に向かって斬りかかって来る。
だが……

ガキンッ！

「攻撃が直線的だな」

俺は瓶割刀を瞬間的に抜いてその少女の攻撃を受け止めていた。

「ふう……あゝその……この子の上司っぽい人。」

早く止めた方がよいよ。俺の流派の真髄は敵を必ず抹殺することだから。

俺がこの子を敵と見る前に止めた方がよいよ？」

「！春蘭やめなさい！」

「ぎよ、御意！」

俺に斬りかかって来た少女は上司らしい少女の命令に従い剣を収める。

「この子が申し訳ないことをしたわね。

私の性は『曹』名は『操』字は『孟徳』よ」

え？

「姉者が申し訳ない。

私の性は『夏候』名は『淵』字は『妙才』だ」

はい？

「……私の性は『夏候』名は『惇』字は『元讓』だ」

まし？

「まじかよ……」

「どうしたのかしら？」

「いや……ちょっと……今の状況に混乱してる」

「「「「？」」」」」

曹操に夏候淵や夏候惇ってめちやくちや有名じゃん……

趙雲とか、程？とかが女の子って本当にすごい状況だ……

「えっと……曹操さん、今の俺はね、あなたが普通の最中にいきなり変な所に連れてこられて

目の前に劉邦と項羽って名乗る人達が居るっていう状況なんだよ」

「「「はあ？」「」」

「いや、そう言いたくなる気持ちはものすごく分かるんだ。でも、本当なんだよね」

「あなたは私達よりもずっと先の時代から来た。そう言ってるのかしら？」

「流石曹孟徳、理解が早い」

「！私の字を知ってるのもそう言うことなのね」

曹操さんは少し俺を警戒している様な態度を取る。

それを見て夏侯惇と夏侯淵もいつでも俺を殺せる構えを取る。

「まあ、この話はここまでで良いでしょ？」

曹操さん達はこんな所で何をしに来たんだい？」

「私達は太平要術の書を盗賊に盗まれたから追いに来たのよ」

確か南華老仙が書いた奴だよな？

多分さっきの奴等が取って行ったのかな？

「さっき盗賊達が来てたけど？」

因みにその盗賊達の特徴はヒゲのノッポとチビとデブ」

「華琳様、目撃情報と一致します」

「そうね。」

あなたしばらく私達の調査に協力なさい」

「分かったよ。」

俺にはこの時代を生きる手段が無いからね」

そして、俺は彼女達に協力することになった。

二話 それぞれの道へ（一刀編）（後書き）

ぐだぐだになってしまいました……

申し訳ありません……

華琳達は次回一刀に真名を紹介します。

それと『誓名』の意味ですがそれも次回紹介します。
話しは変わりますが、を変えたのは一刀と終夜です。
これからは上手く出来るように頑張ります。
では、また次回です。

10 / 12 華琳達の自己紹介の所を修正しました。

三話 霸王の理想（前篇）（前書き）

こんにちわ

ちよつと予定変更で華琳達が一刀に真名を預けるのは後篇にします。

今回は前、中、後篇の三編成です。

では、始まり

三話 覇王の理想（前篇）

「……………」

俺が見ているのは城壁の下に広がる光景。
兵士は戦に使う弓矢を運び完全装備。

「俺達の居た時代なら絶対こんなことはあり得なかったよなあ……………」
いや、でも、この光景は既に体験済みか……………」

ここに居ると『あの頃』を思い出す……………」

「北郷、どうしたのだ？」

「ああ、夏侯惇か。」

いや、何でも無いさ……………」何でもな……………」

「？」

彼女達は知らなくていいことだ……………」

俺達みたいな奴等のバカな物語なんて……………」

「それよりお前、装備品と兵の確認の最終報告を曹操にしなくて良いのか？」

「一刀の言つ通りね」

「か、華琳様！？」

声のした方を見るとそこには曹操と夏侯淵が立っていた。
……俺、ちゃんと周囲を警戒してたのに気がつかなかった。

「数は揃っているの？」

「はい！北郷に声をかけられた為に報告が遅れました！」

こいつ俺の所為にしやがった……

「その一刀には糧食の最終点検の帳簿を受け取ってくるに伝えておいた筈だけど？」

「はい、受け取っておいたよ」

「以外と仕事出来るじゃない」

「常識範囲内だよ。それより……」

帳簿を私ながら俺はこう言った。

「ここには男嫌が多いのか？」

「「「はあ？」「」「」

やっぱりこう言う顔をされると思った……

「いやな、さっきの話なんだけどな。

さつき帳簿を取りに行った時に監督官に会った時に何と云うか……
監督官からものすごい罵倒をもらってさ……

それで『ここには男嫌が集まる所なんじゃないか？』とかそんなこ

とを思つてさ……

それで（以下略）」

「わ、分かつたからやめなさい」

そう言われて俺は素直に愚痴をやめた。

「まあ、良いんだけどさ」

「どうやったら、あれだけの言葉が出るのか不思議よ」

そう言いながら曹操は帳簿を開いて帳簿を読み始めた。
するとみるみる曹操の表情が険しくなっていく。
そして、読み終わり

「秋蘭、この監督官は何者？」

「はっ、先日士官してきた新人です。
仕事の手際が良いので今回の食料調達の担当を任せてみたのですが
何か問題でも？」

「ここに呼びなさい、大至急よ」

「は！」

何かあったのかねえ……
まさか、ものすごく完璧だったとか？
それで曹操にスカウトされるとか？
それだつたらすごいな……

しばらくして

「遅いわね……」

「遅いですなあ……」

「気長に待とうぜ」

日や雲を見る限りそんなに時間は経ってない筈なんだけど……

「……」

「……」

「……」

沈黙が痛い……さっきから曹操が殺気を放ってるんだ。
霸王の覇気がものすごく痛い……

「華琳様、連れて参りました」

あ、さっきの罵倒猫耳女だ。

「お前が食料の調達をしたのかしら？」

「はい、何か問題がありましたでしょうか？」

「指定した半分の量しか準備出来て無いのに問題が無いと思っ？」

半分！？こいつ余程バカか！？曹操に首を刎ねられるぞ！

「このまま出撃したら行き倒れになる所だったわ。そうだったらどうするつもりだったの？」

「いえ、そうはならない筈です」

成程……こいつ余程の天才か……

黙って見てようじゃないか、曹操に向かってどんなことを言うのか……

「理由は三つあります」

「説明なさい。納得出来る理由なら許してあげるわ」

何か嫌な予感が……一応どんなことが起きても対応できるようにしておくか……

「一つ目は曹操様は慎重なお方故、必ずご自分の目で糧食の最終確認をいたします。

そこで問題があればこうして責任者を呼ぶ筈です。ですから生き倒れにはなりません」

おい、そんなことを言えば……

「馬鹿にしているの！？春蘭」

「はっ！」

やっぱりかよ……

夏侯惇はそのまま剣を振り降ろしその少女を真つ二つに……

ガキンツ！

出来なかった。

夏侯惇の剣は俺の瓶割刀に阻まれて少女に近づいていなかった。

「曹操、約束は？」

俺はいつもと変わらない声で聞いた。

覇気は纏わない様にただ普通の声で。

少女は俺が夏侯惇の剣を受け止めたことに驚き過ぎているのか反応が出来ずにいた。

「そ、そうだったわね。次は？」

「は、はい。」

二つ目は糧食が少なければ身軽になり輸送部隊の行軍速度が上がり討伐全体にかかる時間が少なくなります」

ん？それって……

「秋蘭、行軍速度が上がっても移動する時間が短くなるだけではないのか？」

討伐にかかる時間は半分にならない……よな？」

「ならないぞ」

「良かった、私の頭が悪くなったと思ったぞ」

あゝ夏侯惇、大丈夫だ。
それ以上悪くならないから。

「良かったな」

夏侯淵、その台詞は口の端を吊り上げながら言つことじゃないぜ？

「三つ目は？」

「私の提案する策を採れば戦闘時間は更に短くなるでしょう。
よつてこの量で充分だと判断しました」

おいおい……こいつとんでもない奴だな……

「曹操様！どうかこの荀？めを曹操様を勝利に導く軍師として
麾下にお加えくださいませ！」

！荀？だと！？『王佐の才』！？
まさかこんな天才と会えるとは……

「曹操、こいつは麾下に加えるべきだ」

俺は曹操に近づき曹操にしか聞こえない様に話す。

「一刀？」

「俺がこの時代よりもはるか先から来たと言つのは言つたよな？」

「ええ」

「苟？は俺達の時代で『王佐の才』と呼ばれている」

「つまり相当天才と言ったことかしら？」

「間違い無い」

俺は曹操から離れてさっき俺が居た所に立つ。

若干二名がものすごい表情で俺を見てる……

「なら苟？、今回の討伐行を糧食半分で成功させなさい」

「御意！」

流石にあんまり人が死ぬのは見たくないからな……

何とかなったか……だけど……苟？は大丈夫なのか？

糧食半分とか絶対きついだろうに……

そんなことを思いながら俺は今から人を殺しに行く覚悟を決めた。

三話 覇王の理想（前篇）（後書き）

10/13日修正しました。

四話 霸王の理想（中編）

荀？を仲間に加えた後盗賊討伐の為に行軍していた。
しかし……

「俺の感覚だと今回の行軍速度は普通の行軍速度よりも少し早い程度だと思っただけだな……」

糧食も半分しか無いからもう少し急ぐべきだと思っただけ……
そう思っていると隣に居た夏侯淵がこう返した。

「それは私も思うがそこは荀？の腕前しだいだろう」

「そうだろうけど……すごいことになったよなあ」

「うむ……」

糧食を半分で終わらせるとか言っただけで無茶がありすぎだよなあ……
お？噂をすれば……

「おーい、荀？！」

「気安く話し掛けないでくれない？
耳が穢れるんだけど」

「口が悪いなあ……」

まあ、そんなことは置いといて……

今回の一件大丈夫なのか？

糧食を半分で済ませるとか無茶にも程があると思っぞ？」

「別に平気よ。」

曹操様の軍の討伐にかかる時間や鍛練の精度を測った結果を元にして計算したんだから」

「すげえ……もしかしたら終夜と同等かも……いや、そんなことは……あるのかな？」

「何よその変な顔は」

「何でもないって。というかさっきのやり取りは肝が冷えたぞ。な、夏侯淵？」

「うむ、北郷の言う通りだ。そもそも北郷が姉者の剣を受け止めなければ今頃この場には居なかったぞ」

「あの脳筋があんなことをするって思う？ あんな脳筋が居なかったらもう少し安全にやれたわよ」

夏侯惇には絶対聞かせたくない言葉だな……

「お前達、ここに居たのか」

「ひゃわっ!？」

「やべえ……思わず間の抜けた反応しちゃった……夏侯惇だから別に少し不思議に思うただけだよな？ 大丈夫だよな？」

「何だ？その間の抜けた反応は？」

「いや、何でもない。」

「ところで何かあったのか？」

「何とか誤魔化せたか？」

「ああ、お前達全員華琳様がお呼びだ付いてこい」

「よし！何とか誤魔化せた！」

「馬鹿で良かった！」

「分かった」

「うむ」

「了解」

「そう返事をして俺達は夏侯惇の後に付いて行った。」

「曹操の居る場所」

「どうしたんだ？曹操」

「何でも前方に謎の集団が居るらしいのよ。
数は大したことは無いらしいけど……」

「ああ、成程。」

「それで偵察隊を出すかどうか悩んでるだな」

「ええ、苟？、どうするべきかしら？」

「偵察隊を出しましょう。」

夏候惇、北郷あなた達が指揮を執って」

夏候惇もかよ……

色々ヤバイ様な気がする……

「待った、俺だけで良い」

「は？何を言ってるの？」

「もし盗賊だつたら夏候惇は何も考えずに全滅させちまうぞ。
上手くやるから俺だけにしてくれ」

その言葉に苟？は納得が行ったのだろう。
言い直した。

「やはり北郷だけで行きなさい」

「しゅううらあん、何だか馬鹿にされている様な気がするぞお」

「姉者はものすごく強いから偵察程度には出せないと言っているの
さ。」

「そうか！ならば良い！」

こいつ俺の予想以上にバカだ……
どうしようも出来ないほどにバカだ。

「……ああ、姉者は可愛いなあ」

ん？もしかして夏候淵って……シスコン？
マジかよ……

「一刀、早く行きなさい」

「あ、ああ」

取りあえず気にしないでおこつ……

謎の集団の居る場所

「おりやあつ！」

ドゴオオンッ！

俺は今信じられない光景を見ている。

「うりやあつ！」

バアアッン！

だつてそうだろう？

目の前にあんなに重たそうな持つて盗賊らしき連中を倒してるんだ
ぜ？

我が目を疑いたくなるだろ？

だが……

「はあはあ……数が多すぎるよお」

もう体力切れらしい。

それもそうだろう力がいくらあるとはいえ彼女は少女なんだ。
体力には限界がある。

「野郎共一斉に掛かれ！」

「っ！」

少女が顔を歪めた時俺は考える前に体が既に動いていた。

俺はまず瓶割刀を抜いて一番近くに居た男の首を刎ねた。

次にそれを見た仲間の男が襲い掛つてきたのでそれも刎ねた。

盗賊達は一斉に襲い掛つて来るが俺はそれを気にせず一人づつ最小の動きで首を刎ねていく。

そして残り五人にまで減った時盗賊達は撤退を始めた。

「ふう……君大丈夫？」

「え、あ、はい」

「おい！」

俺は付いてきた兵士を呼んで指示を与えた。

「はっ！」

「撤退して行つた兵士を追え！」

もしかしたら敵の本拠地を割り出せるかもしれない！」

「はっ！」

さっきまで全滅させようかな？

って思ってたのは秘密だ。

瓶割刀を鞘にしまつてさっきまで一人で戦つてた少女の方を向いた。

「なあ、何で一人で戦つてたんだ？」

「それは……」

少女が説明しかけた時曹操達がやって来た。

「あ、ごめん、ちょっと待つて。

曹操！こっちだ！」

「っ！」

ん？少女の顔が少し歪んだ様な気が……

気のせいかな？

「一刀、謎の集団はどうしたの？」

「あいつ等は本拠地に逃げてつたよ。

今追わせてるからすぐに本拠地が分かる筈だよ」

「あら、気が利くじゃない」

「褒めて頂いて恐縮だよ」

「あ、あなた……！」

何だ？殺気？

いや、そんな邪悪なもんじゃない……けど怒気は少なからずある。俺はいつでも行動出来るように瓶割刀に手をかける。

「ん？この子は？」

「お姉さんもしかして国の軍隊……っ！？」

「ああそうだけど……っ！」

振り降ろされたのは少女の持っていた鉄球だった。俺は何とか瓶割刀で防いでいた。

……瓶割刀じゃなかったら碎けてたかな？

「なっ！？貴様何を！？」

「国の軍隊なんか信用出来るか！
ボク達を守ってくれないくせに税金ばかり持って行って！」

「だから君は一人で？」

「そつだよ！ボクが村で一番強いから邑の皆を守らないといけないんだ！」

くそ……本気を出せない……！

「だらあぁっ！」

「っ！」

『不活一刀流』を背負うならこの少女を……！
でも……！

一刀……終夜をよろしくね……

あんなことはもう……！

「っ！」

「すきありいいいいっ！」

「っ！」

しまった……！やられる……！

「二人共、そこまでよ！」

「え？」

「剣を引きなさい！その娘も！一刀も！」

「は、はい！」

曹操の覇氣にあてられて少女は鉄球をその場に落とした。
……地面陥没したけどどれぐらいあれ重いんだ？

「一刀、この子の名は？」

「聞いて無いな。」

君、名前は？」

「き……許緒と言います」

こう言う威圧感のある相手を見るのは初めてなんだろうな。
許緒と名乗っていた少女は完全に曹操の空気に吞まれている。

「そう……」

そして次に曹操が取った行動は俺達を驚かせた。

「許緒、ごめんなさい」

「……え？」

曹操は許緒に頭を下げた。

その場に居た皆が曹操がそんなことをするとは思っていなかったのだろう。

全員呆然している。

「名乗るのが遅れたわね。私は曹操、山向ここの陳留の街で刺史をしている者よ」

「山向ここの……？あつ、それじゃっ！？」、「ごめんなさい！」

許緒は曹操が名乗るといきなり謝って来た。

「な……？」

「山向ここの刺史さまはすぐ立派な方だって噂を聞いてます！」

それなのにボク……！」

「構わないわ。今の国が腐敗しているのは刺史である私が良く知ってるもの。」

官と聞いて許緒が憤るのは当たり前前の話だわ」

流石曹孟徳だな……

霸王としての貫録がある。

「で、でも……きゃふっ！」

それから先を言おうとしていた許緒を頭を撫でることで黙らせた。

「曹操が良いって言ってるだろ？」

どうしても謝りたいって言うんならその力を曹操に貸してやってくれよ」

「あのあなた……」

「ああ、俺は北郷一刀。」

今は曹操に協力してる者だ。
好きに呼んでくれて良いよ。

それからさっきのことは気にしなくて良いよ」

「は、はい……」

「それと敬語も無しで良いよ」

「うん！」

誰が何て言おうと不安なんだろうな……
なら……

「曹操はいつか霸王になる。
その時になったら曹操は君の邑も守ってくれるんじゃないか？
なあ？曹操」

俺がそう聞くと曹操は力強く頷いてこう言った。

「ええ、一刀の言う通りよ。

私は霸王になって大陸の皆が安心して暮らせる様にするわ」

「この大陸の……皆が……」

「曹操様！偵察が戻りました！
盗賊の本拠地はすぐそこです！」

「分かったわ。ねえ、許緒」

「まずはあなたの邑を脅かす盗賊を根絶やしにする。
そこから良いから力を貸してくれないかしら？」

「はい！」

許緒はその問いに力強く頷いた。

「許緒は取りあえず秋蘭と春蘭の下に付ける。
分からないことは教えてあげなさい」

「はっ」

「了解です！」

「では、総員、行軍を開始するわ！騎乗！」

「総員騎乗！騎乗っ！」

そして俺達は許緒の邑の盗賊を根絶やしにする為に行軍を再会した。

五話 霸王の理想（後編）

盜賊の本拠地は許緒と会った所からそんなに離れていない所にあった。

余程上手く探さないと絶対に見つからなかっただろう。

「敵の数は把握できているのかしら？」

曹操がそう聞くと夏侯淵が答える。

「はい、およそ三千と報告がありました」

連れてきた戦力は千と少しだから盜賊達はその三倍の戦力だ。

だが、苟？は別に大したことではないという様な表情でこう言った。

「連中は統率力も無く訓練もされていませんから我々の敵ではありません」

「けれど策はあるのでしょうか？糧食の件、忘れていないわよ？」

「無論です」

すごい自信だな。

ま、あの荀文若だからそれも当然か。

「説明なさい」

「まず、曹操様は少数の兵を率い、砦の正面に展開してください。その間に夏侯淵、夏侯惇の両名は残りの兵を率いて後の崖に待機。

本隊が銅鑼を鳴らし攻撃の準備を勻わせれば敵は必ず外に出てくるでしょう。

その後曹操様は兵を退いて充分に引き離れたところで夏侯淵と夏侯淵の両名で敵を叩きます」

ん？それってまさか……

「それはまさか、華琳様を囿にしろと言う訳か！」

やっぱりそうなるよな？

荀？も夏侯惇が反対するのは予想済みって顔だし。しょうがない……なら納得してもらうか。

「なら夏侯惇が曹操を守れば良いだろう？

俺と夏侯淵で敵を叩こう」

「ちょっと！何勝手なこと……！」

俺は夏侯惇に聞こえない様に小声でこう言った。

「良く考える……夏侯惇が丁度良い時期に攻められると思うか？

敵を見た瞬間に突っ込むのが目に見えてるだろうが。

俺なら丁度良い時期を見つけて攻めるから俺に攻める役をやらせろ」

すると、荀？は納得した顔で頷いた。

「やはり、敵を叩く役は北郷と夏侯淵にやらせます。

護衛は許緒と夏侯惇が」

「よし！許緒！全力で華琳様をお守りするぞ！」

「はい」

そうして荀？の策の下戦が行われることになったのだが……

「あれ？曹操達が下がるのが思ってたのより早いな」

そう、俺が思っていたのよりも曹操達が下がって来るのが早かった。
何があったのだろうか？

「華琳様達は無事の様だな。
姉者も無事の様だ」

夏侯淵はそう言つと安堵の表情を浮かべる。

「良かったな」

「うむ」

そして、しばらく経つて……

「北郷、敵の殿だ。
そろそろ攻めるぞ」

「了解」

俺は刀を抜いてそう返事をした。

「夏侯淵隊！撃ち方用意！」

夏侯淵の隊の兵士は弓をつがえて……

「敵中央に向けて、一斉射撃！撃ていつ！」

矢を放った。

それにより敵の兵士に動揺が走る。

俺はそれを見て敵に襲い掛る準備をする。

「夏侯淵、援護は頼むぞ」

「良からう。」

行け！」

それを聞いて俺は敵に襲い掛った。

さあ、『不活一刀流』の真髓を獣達に見せてやろう……

第三者 side

一刀は一振りで確実に敵の数を減らしていく。
その姿は敵味方限らずすらくこう思わせていた。

『恐ろしい』

と。

敵は恐れ慄き、味方は一刀が敵で無かったことを安堵する。

敵は一刀から逃げるように撤退していく。

それは正しい判断だろう。

もし、逃げずに一刀に挑むのであれば……

その死骸は本当に生き物であったのか疑う程酷い物になっていただろう。

「あれが、北郷なのか？」

夏侯惇は剣を振りながら一刀の姿を見ていた。

本来ならばそんな暇は無いが敵は大半が逃げ去っていた。

この戦場において未だ戦う意思を持っているのはほぼ居ない。

そして、遂に一刀の周りには『人』が居なくなつた。

それを確認した一刀はゆっくりと刀を鞘にしまいゆっくりと曹操達の居る方へと近づいた。

「皆大丈夫か？」

曹操達に近づいた一刀が一番に言った言葉は曹操達を心配する言葉だった。

その言葉を聞いてまず一番に反応したのは曹操。

「え、ええ。ご苦労さま」

次に夏侯惇。

「北郷、お前、相当強いな」

次に夏侯淵。

「うむ、もしかしたら姉者以上かもしれん」

次に許緒。

「お兄ちゃんすごいよ！」

次に荀？。

「死ねば良かったのに……」

そんな五人の言葉を聞いて一刀は微笑む。
すると……

「……／／／／／」

『朴念仁の微笑み』（矢吹命名）によって五人は陥没した。
それに天然鈍感種馬の一刀が気付く訳もなく……

「あれ？皆どうしたの？」

そう言った。

五人が取る反応は勿論……

「……はあ……」

溜め息をついた。

何故一刀は溜め息をつかれたのか分からなかったが一刀は首を傾げながらこう言った。

「なあ、一つ頼みがあるんだけど」

「何かしら？」

「俺、正式に君達に士官したいんだ」

「何故？」

曹操がそう聞くと一刀はこう答えた。

「君達の理想を見て支えてみたいと思った。

許緒に頭を下げた時、俺は君こそが霸王に相応しいと思ったんだ」

「そう……ならば良いでしょう。

北郷一刀、私の手足となりなさい」

一刀はその言葉を聞いて臣下の礼をとった。

「御意。

あなた覇道を妨げる全ての障害を取り除きましょう」

「一刀、あなたの真名を聞きたいのだけど……

あなたの居た所にも真名はあったのかしら？」

「いえ、ありませんでした。

ですがそれに当たる物があります。

『誓名』と言う名で、その者の誓を示す物です。

我が誓名は『和刀』と申します。

和を守る刀そして、乱世にある世界を和へと導く刀です」

「そう、あなたの誓名とやらを預かりましょう」

「それともう一つお願いがあります」

「聞きましょう」

「誓名は簡単に表に出していけない物なのです。

故に余程のことが無い限り誓名で私のことを呼ばないでください」

「良いでしょう」

そうして一刀は霸王曹孟徳の部下となった。
彼女を霸王にするという誓の下に……

拠点話 一刀篇 part 1

何でこんなことになったんだろう……

俺は今春蘭（誓名を華琳に預けた後に皆預けてくれた）と対峙している。

ことの始まりは俺が適当に城の中を歩いていた時に春蘭に話しかけられた

「一度私と仕合え！」

何ともまあ……春蘭らしい言葉で……

俺も鍛練したかったし承諾した。

ここで承諾したのがいけなかった……

彼女はあの『夏侯惇』だぜ？

俺もまあ……何と言うか……だけど！

あの『魏武の大剣』と戦うとか真面目にヤバイ。

本능が危険信号を発してるぜ！

「行くぞ、北郷！」

はい、処刑宣告！

しょうがない……俺も死にたくないしなあ……

久しぶりに真面目にやるか……

「ああ、来い……夏侯元讓！」

「っ！」

一瞬だけ春蘭は俺の覇氣に怯んだ様な顔をしたがすぐに顔を引き締

める。

そして俺に全力で襲い掛る。

その一撃はまさしく大剣を持つ者に相応しい一撃。

かわすことは出来るがその威力は地面に穴を開ける程の一撃。

先程まで俺が居た所には穴が開いていた。

「（こいつ……全力でやりやがった……！

でも……久々だ……最近矢吹達ともやってなかったからな……

楽しめそうだ……）」

「だらあっ！」

「ふっ！」

ガキンッ！

「北郷！中々やるじゃないか！」

「そつちこそ！」

ガキンッ！ガンッ！ガンッ！

「そろそろ私は本気を出させてもらうぞ」

「っ！」

あんな馬鹿力でも本気じゃないのかよ……

でも……そろそろ俺も準備完了だ。

鈍ってた体も解れてきた。

「だらあっ！」

春蘭の本気の一撃が俺に襲い掛って来る。
俺は瓶割刀を鞘にしまう。
そして……

「不活一刀流……拔刀術……『殺鬼』！」

『殺鬼』……それは有無も言わず鬼を殺す為に創られた必殺の一撃。

その技は決まったら鬼を一刀両断する。

「ぐはあっ！」

流石に殺す訳にはいかないから勿論峰打ちだ。
拔刀術で峰打ち結構難しかった。

「春蘭に勝つなんてすごいわね、一刀」

「か、華琳様！？」

「本当に良い勝負だったよ！兄ちゃん！」

「絶対に偶々よ！」

「うむ、北郷も中々やるじゃないか」

やっぱり姉妹だな。
同じこと言ってるよ。

「北郷もつ一度仕合え！今のは油断した！」

「え……」

「『え……』ではない！早く構えろ！

華琳様！今すぐこやつに勝って見せます！」

「そう、期待しているわ」

ちよ、そんなこと言ったら……春蘭は……

「はい！」

やっぱり……

火が付いちやったか……

「分かったよ……一度だけだよ？」

「その一度で勝つてやる……！」

その後一度と言わず十回程やって春蘭が泣いて『もう仕合たくない

！』とか言うまで俺はずっと

付き合わされた……

六話 それぞれの道へ（矢吹篇）

「つつ……」

体中が痛てえな……

何だか高い所から落ちた時みたいだ……

「ここはどこ……ここ……」

目の前を見たらとんでもない光景だった。

「完璧な荒野だ……」

日本にこんな所は無いだろってぐらいの荒野。

「拉致でされたか？」

もつと慌てるべきなんだろうが慌てても何にもならない。

ここは冷静になって考えるべきだ。

「俺の名前は古城矢吹……聖フランチェスカ学院二年……部活は所属していない……」

上から鉄骨が落ちて来て……そこで意識が無くなった」

ここに来た経緯以外の記憶の欠落は無い。

記憶喪失って訳じゃなさそうだ。

「他に何か変わったことは……」

俺はそう思っただけ自分の周りを見る。

すると、近くに一振りの刀が落ちてるのが目に入る。

「これまさか……『童子切』か!？」

『童子切』とは清和源氏の嫡流である源頼光が、丹波国大江山に住み着いた鬼・酒吞童子の首をこの刀で切り落としたという逸話を持つ刀だ。この刀は確か俺の祖父が言っただけ東京国立博物館から買い取って（奪い取ったとも言っただけ）本家に保管されている筈だが……

「何でここに……」

俺はそう思いながら鞘から童子切を抜く。

「人はあんまり殺したくは無いんだがな……」

自分の身を守る物は持っただけの方が良い。

無手でもそれなりには戦えるがやはり不安要素は残る。

俺は近くの岩に近づいて抜刀術の構えをとる。

そして……

「はあっ!」

抜刀術は上手く行った。

岩は俺が斬った所から上が音を立てて崩れ去った。

「ふう……」

俺が抜刀術をした理由は二つ。

一つはこの刀の調子を見る為。

抜刀術を見る限りこの刀の調子は抜群。

二つ目は俺が斬った岩とは違う岩の後で隠れている奴等に警告するためだ。

「いつまでも隠れてんな。」

あんた等が何かしない限り俺は何もしない。安心して出て来い」

その警告から少しして岩から三人の少女が出て来た。

変な服を着ているがまあ、そこら辺は気にしない。

問題なのは三人の内二人が相当のやり手だってことだ。

「俺は古城矢吹。あんた等何者だ？」

出来る限り敵意を含めないで聞いたが三人の少女達は未だ警戒を緩めていない。

すると、三人の中でもしっかりしている少女が名乗り出た。

「私は姓を『関』名を『羽』字を『雲長』幽州の偃月刀とは私のことだ」

「……は？」

ふざけてるようには見えないし……まさか、タイムスリップか？

だとしたら俺はこの時代に連れて来た神を恨みたいな……

俺はこの時代には絶対に来たくは無かったのに……

って、ちよつと待てよ……確か関羽は男だったような……

じゃあ、これはタイムスリップじゃなくてパラレルワールドに来たのか？

「どうしたのだ？」

「な、何でも無い。大丈夫だ」

ここから迂闊には横文字とか使わないようにしないとな。
意味分らないだろうし。

「鈴々は姓を『張』名を『飛』字を『翼徳』なのだ！」

この子が張飛？

マジか……

何でもありだな……

パレルワールドって……

「私は姓『劉』名を『備』字を『玄德』と言います」

「！」

この子が劉備か……

成程な……

「あの聞きたいことがあるんですけど……」

「ああ、良いぞ」

「あなたが天の御遣いですか？」

「何それ？」

天の御遣いとかめちゃくちや胡散臭過ぎるだろう。
そう思って聞いた。

すると……

ぎゅるるるるっ

「あはははは」

張飛のお腹の虫が盛大に鳴った。

「どうやら張飛がお腹減ってるようだし近くの街に移動しようか？」

「そうだな……」

関羽さん……あんまり呆れたような顔をしてやるなよ……張飛が可哀想だよ……

街の酒家

「成程な……」

街の酒家で昼食を取りながら大体の事情を説明してもらった。

官の腐敗していたり盗賊達が民から食料を奪っていたり飢饉の兆候が見え始めたりと……

もう、救いようのない乱世だった所に管輅とか言う占い師が天の御遣いが乱世を鎮めるとか言う占いをしたらしい。

「確かに俺はこの世界の住人じゃないからな。

だから、もしかしたらお前達が求めてる天の御遣いかもな」

「なら……！」

「一つ！一つだけ聞かせろ」

「はい？」

これは重要な質問だ。

もし答えが俺の納得出来る物で無かったら俺は絶対に協力しない。

「お前の理想って何だ？」

「私の理想は大陸中の皆が笑顔でいられることです」

「それはただの『甘い理想です』え？」

「私はそれでもその理想を掲げていきます。

ついて来てくれた人達を裏切らない様に」

その目はとても強い目だった。

それ以上その理想は甘いとは言わせないような……

「そうか……」

なら協力しよう。

天の御遣いとしてな」

「ありがとうございます！」

「これからよろしくお願いします！」

「よろしくなのだ！」

「さてと！そろそろ行くとするか！」

そう言つて俺は立ち上がる。

「うん！ごちそうさま！」

え？

「ごちそうさまでした！」

はい？

「ごちそうさまなのだ！」

まさか……

「会計俺？」

「「「はい（なのだ）！」」「」」

うつそ

マジかよ……

「あのなあ……」

俺は女将に聞こえない様に三人を集めて小声で言う。

「俺はこの世界に来たばかりなんだぞ……
金なんてある訳無いだろうが……」

「え！嘘！？」

「しっ！声がでかい！」

「ですがどうするのですか？」

「どうするか……」

俺はそう言いながらポケットに手を入れる。

すると手に違和感を感じてポケットから手を出してみる。

「そついえば……！」

俺の人差し指には二つの指輪があった。

「そつだ！これがあったんだ！」

「「「？」」」

「関羽、これ売ってきてくれ！」

そう言つて指輪を渡す。

関羽は少しの間その指輪を見ていたが店を出て指輪を売りに行った。

「ご主人様、あの指輪は？」

「少しな……」

あの指輪は古城家次期党首の証だ。
俺が十歳の頃に祖父から渡された。

「ってかご主人様って何だ？」

「え？ 私達のご主人様だからご主人様って呼んでるんだよ？」

「どついう理屈だ……」

俺がそう呟いてから少しして関羽は帰って来て会計を済ませると女将が『あんた等の理想に心うたれたからこれを持ってきな！』と言って酒を渡してくれた。

桃園

「綺麗だなあ……」

周りは桃の花。

桜みたいで本当に綺麗だ……

あの時……俺達も……

いつまでも桃の花を見ていられる時代を創りたいわね……

「……ほっりん萌琳」

彼女の名前を思わず呟いてしまったことに気が付き俺は首を横に振る。

彼女はもう居ないんだ。

いつまでもくよくよしてはいられない。

「酒なのだ……！」

「こら！鈴々！いい加減にしろ！」

「？あの子の名前って張飛だろ？」

「あれ？天の世界には真名は無かったの？」

「真名？」

知らない言葉に首を傾げると関羽が説明してくれた。

「真名と言うのは家族や親しい者にしか許さない名です。その者の生きざまを示す物です」

「へーなら俺もそれに等しい物持ってるな。

でも、簡単には呼ばせられないけど他人に教えることだけでその者を認めてるってことになる物だ」

「ねえ、ご主人様。

私達のことを真名で呼んで？」

「ああ、分かった」

「じゃあ、私の真名は桃香！」

「私の真名は愛紗と申します」

「鈴々の真名は鈴々なのだ！」

「俺は守風つてのがこの世界で言う真名に当たるかな？
よろしく。でも、絶対に呼ぶなよ？」

「うん（はい）（なのだ）！」「」

俺は三人が頷いたのを見て少し考える。

こうして真名を教え合い互いを認め合って更にここは美しい桃園なのだから

桃園の誓をするべきではないかと。

その考えに至って俺は三人にこう言った。

「結盟しようぜ。」

民の為に乱世を鎮めるって」

「うん（はい）（なのだ）！」「」

三人は各々の盃をお掲げた。

俺もそれに続く。

「我等四人！」

「姓は違えども、姉妹の契りを結びしらは！」

「心を同じくして救い合い、皆で力無き人々を救うのだ！」

「同年、同月、同日に生まれることを得ずとも！」

ここは本当は劉備であるが言つべき所だが桃香が俺に目で伝えて来たので俺が言う。

「願わくば、同年、同月、同日に死せんことを！」

有名な桃園の誓が俺を含まれて行われた……
そのことを胸に刻み俺と姉妹三人の乱世を鎮める物語が今、ここに
始まった……

七話 公孫贊の元へ

俺は今公孫贊の城の玉座の間に居る。

ん？『描写を端折り過ぎだ』だって？

それもそうだな。

まず、桃園の誓をした後どこに行くかって話になったんだ。

そうしたら桃香が『この辺りの太守が私の友達なの！』って言うてとりあえず。

その友達の所、つまりここに来ることになったんだ。

そこで手ぶらで行くと足元を見られるから指輪を売って店の会計に使わなかった分を使^{っばい}って

兵隊^{っばい}人達を百人程連れてこの城に来て今に至る。

そして、肝心の桃香だが……

「白蓮ちゃん〜！それでね〜！」

「あはははは！中々充実した毎日を過ごしてたんだな！」

かつての知り合いとの再会を喜んでいた。

ホント……こう言うのは喜んでやるべきかもしれないんだけど話が出来ないしな……

でも、邪魔するのは何て言うか……

そんなことを考えていると柱の後から一人の少女がやってきた。

「伯珪殿、そろそろ本題に入られては如何か？」

そちらの御人が本題に入れずに困惑しております」

あの少女なかなか出来るな……

生粋の武人って言う奴か。

「ああ、そうだな。

すまなかつたな。

私は姓を『公孫』名を『賛』字を『伯珪』と言う。
よろしく頼む」

「私は姓を『関』名を『羽』字を『雲長』」

「鈴々は姓を『張』名を『飛』字を『翼徳』なのだ！」

「俺は古城矢吹。

天の御遣いだとか言うもんに成り行きでなつたもんだ」

「はあ？天の御遣いつて管輅の予言だろ？

与太話じゃないのか？」

「ああ、それでも俺は天の御遣いつて言う『役』を演じることになつたのさ」

「？」

あ、こいつ駄目だ。

これで意味分らないとかこの乱世生きていけないわ。

「伯珪殿、この御人は劉備殿を助けるこの四人の手助けをする為に天の御遣いと言う名を使うことにしたのでですよ。
時に古城殿」

「何だ？」

「あなたは北郷一刀殿と言う方と知り合いですか？」

え？今こいつ……何て……？

「一刀って言ったのか？」

「はい。」

それが何か『どこであつた！？』『?!』

「どこであいつと会つた！？

あいつは元気だったか！？」

「お、落ち着きくだされ！

北郷殿は見た限りお元気でした！

北郷殿とは陳留の郊外で出会いました！」

おっと、つい、感情的になってしまったか。

「悪いな。

一刀は俺と親友なんだ。

色々あつて離れ離れになつちまつてな。

それで感情的になつたんだ」

「そうですか。

手掛かりが合つて良かったですね」

「ああ」

あれ？本題から凄く遠のいてるな……

どう修正しよう……

「ところで桃香」

「何？白蓮ちゃん？」

「本当の兵士は何人居るんだ？」

おっつゝ？

ばれてるゝ……

ここは正直に言うべきか……

「すまん…… 本当の兵士は居ないんだ。
でも、全力で仕事するからここに置いてくれ！」

「あ、ああ。」

ここは人手が足りないからむしろ歓迎するよ。
よろしく頼む」

つしやあああつ！

首がつながった！

これで駄目だとか言われたらどうしようかと思っただぜ……

さて、一刀がこの世界に来てるなら終夜も来てるだろうな……

一刀…… 終夜…… お前等どうしてるんだ？

俺はそう心の中で二人に尋ねた。

八話 大徳を持つ者達の初陣（前篇）

侍女に連れられて来て見たのは城門の傍に居る武装した兵士。その光景を見て今から戦をすることを予感させた。

「……………どうしても思い出しちまうな」

俺は頭を横に降ってあいつのことを頭から追い出す。変なことを考えていたら負けるのが目に見えている。

「すごーい！これ全部白蓮ちゃんの兵隊さんなの？」

「ああ、でも、半分は義勇軍半分だけだな」

それだけ義勇軍が集まったと言うことはそれだけ大陸の情緒が乱れ大陸の人達が危機感を

感じていると言うことだろう。

この大陸はどうなることやら……

「古城、お前達は左翼の部隊を率いてくれ」

「あ？分かった」

こいつ随分剛毅だな。

それだけ信用されてるってことかな。

「じゃあ、口上に行ってくる」

「頑張つてね、白蓮ちゃん」

「ああ！」

公孫贇は軍の先頭に立って口上を始めた。

「諸君！いよいよ出陣の時が来た！

今まで幾度となく退治してきた盗賊共！

今日こそ殲滅してくれよう！

公孫の勇者よ！今こそ功名の好機ぞ！

各々存分に手柄をたてい！」

「うおおおおおつ！」

大地を揺るがす鬨の声を聞いていた公孫贇が

「出陣だ！」

出陣の号令を出した。

意気揚々と城門から出発する兵士と共に俺達も隊を率いて出陣する。
すると桃香が心配そうな顔でこう聞いてきた。

「ご主人様、天の世界に戦はあった？」

「無かったぞでもな……」

無かったことには無かったが……

「戦は初めてじゃない」

「え？」

桃香は意味が分かっていないらしい。
まあ、それはそうだろうな。

「いつか話すさ」

俺としては絶対に話したくないけど……
そんなことを思っている

「全軍停止！これより我が軍は鶴翼の陣を敷く！
各員粛々と移動せよ！」

本陣からの伝令が命令を伝えながら前線に向かって走って行った。

「兵の指揮は俺と……愛紗に任せて良いか？」

鈴々を選ぼうとしたけどなんかなあ……

「はっ！お任せください！」

「鈴々は？」

「桃香を守っててくれ」

「分かったのだ」

あれ？鈴々は『そんなの嫌なのだ！』とか言う子だと思ってたんだ
けどな……

まあ、良いか。

今は兵の士気を上げ無いと。

「聞け！劉備隊の兵どもよ！敵は組織化もされていない雑兵共だ！この戦で負けることは許されない！負ければお前達の守りたい者は盗賊の好きにされてしまう！守りたくば盗賊共に勝て！そして生き残れ！」

「うおおおおおっ！」

「全軍戦闘態勢を取れ！」

愛紗の号令と共に兵士達が拔刀する。

俺も童子切を拔刀する。

そして……

「盗賊達が突出してきました！」

緊迫した面持ちの伝令が本陣に向かって疾走して行った。

「古城隊、行くぞ！」

「関羽隊！我等も行くぞ！」

全軍突撃iiiiiiiiiii！」

そして俺達の戦が始まった。

九話 大徳を持つ者達の初陣（後編）

今は戦の後。

愛紗の活躍があつて敵はどんどん倒されていった。

一方俺はと言つと……

「ご主人様すごかったね、敵をどんどん倒して」

桃香はそう言つてくれているが実は違う。

「そんなこと無いって。」

殆んど愛紗の活躍だったから」

そう、殆んど愛紗が敵を倒して活躍の場なんて全く無かつた。

「いえ、ご主人様の武に比べ私の武など足元にも及ばないでしょう」

彼の関雲長にそう言われると何だかくすぐつたい。
すると趙雲が俺を見ているのに気付き話しかける。

「さつきから俺を見てどうしたんだ？」

「いえ、あなたと一度手合わせしてみたいと思ひまして」

「え！？」

まじかよ……彼の趙子龍と戦うなんて出来る訳無いだろうが……
何とかしないと……

「俺は絶対に戦いたく無いな」

ストレートにズバッと言えば大丈夫……の筈だ。

「そう言わずに」

駄目だったあああつ！

この戦闘狂め！

「何か失礼なことを思いましたかな？」

「思ってたねえよ」

つたく……

勝手に心を読みやがって……

「それより趙雲殿。

最近おかしいとは思わないか？」

愛紗のその言葉を聞いて趙雲の纏っている雰囲気が変わった。

「確かに、最近匪賊共の動きが活発化している」

「そうだったら飢饉も起こるだろうな」

「収穫した食べ物が奪われちゃうんだから飢饉が起きるのは当たり前なのだ」

「それと共に国境周辺で五胡の影もちらついている。何かが起ころうとしているのは確かだな」

三人の言葉をまとめるとこれから大きな動乱に繋がると言うことだ。
無論そうなるだろう。

これから様々な波が流れる。

相当大きな波が……

そんな中で俺達はどうやって立って行くのか。

それが一番重要なことだ。

俺はそんなことを思いながら蒼い、それでいて不気味な空を見上げた。

拠点話 矢吹篇 part 1

「おらあっ!」

「くっ!」

俺は今趙雲と仕合している。

事の始まりは二時間前だ。

いきなり趙雲が部屋に来たと思うと

『古城殿!仕合して頂きたい!』と抜かしてきて二時間程説得を試みたが失敗。

結局今に至る。

因みにギャラリーは桃園組全員と若干影が薄い普通の人。

「影が薄いと言っなー!」

今聞こえた事は無視しよう。

まあ、そんな訳で戦っている訳だ。
状況としては俺が有利だ。

「はあっ!」

「甘い!」

確かに趙雲の槍の速さは厄介だ。
それでも……

「軽い!」

「ぬぐっ！」

厄介なのは速さだけ。

何とか受ければ後は弾ける！

俺は趙雲の槍の先の開いている部分に刀を挟み思いっきり手首を捻る。

すると槍が傾き趙雲は体のバランスを崩す。

「むっ！」

俺は素早くで刀を趙雲の槍の先から抜いて趙雲に突きつける。

「俺の勝ちだ」

「負けました……」

俺は童子切を鞘にしまい皆の所に近づく。

「ご主人様すごいよ！」

と、桃香。

「素晴らしい武でした」

と、愛紗。

「お兄ちゃん！今すぐ鈴々と仕合っのだ」

と、鈴々。

「いやゝまさか、勝てるなんて思わなかったぜ。
途中何回もひやひやしたゝ」

俺はそう言いながらテーブルに突っ伏した。
本当に疲れた……

「古城殿、私の真名をあなたにお預けしましょう」

「あ？良いのか？」

「ええ、あなた程の武を持つお方なら構いません」

「なら、俺も教えるかな。」

「つっても俺の場合」

説明中

「ってことだからな」

「分かりました。」

私の真名は『星』と申します」

「俺の誓名は守風だ」

俺はそう言って手を前に差し出す。
星はその手を強く握った。

「真名を交換したところで古城殿。
もう一度仕合いましょう」

恐るべし……戦闘狂。

「分かった……もう一度だけだぞ」

そして俺はもう一度仕合うことになったのだがその後愛紗や鈴々と仕合うことになり最終的には

三人同時に仕合伸ばしてしまい次の戦では俺一人で三人の部隊を俺が率いることになってしまったのは余談である。

十話 それぞれの道へ（終夜編）

「くっ……」

身体中が痛い……

高い所から落ちたのだろうか？

「ここは……どこだ？」

目を開けると完全な荒野。

俺の記憶では日本にこのような所は無い。

「拉致でもされたか？」

そう考えて首を横に振る。

上から鉄骨が落ちて来たのだ。

拉致なんてされる訳が無い。

普通ならば俺達は原型も留めていない程に残酷な骸になっているだろう。

では何故俺はここに居る？

一刀と矢吹はここに居ないようだがあの二人はそう簡単に死ぬような奴らでは無いだろう。

「俺の名前は潺^{せせ}終夜……聖フランチェス力学院二年……部活は所属していない……」

上から鉄骨が落ちて来て……そこで意識が無くなった」

ここに来た経緯以外の記憶の欠落は無い。
記憶喪失と言う訳では無さそうだな。

他に何か変わったことは……」

俺はそう思い自分の周りを見る。

すると、近くに一振りの刀が落ちているのが目に入る。

「これまさか……『大包平』!？」

おおかねひら
大包平は、平安時代の古備前派の刀工包平作の日本刀（太刀）。国宝に指定されている。日本刀の最高傑作として知られ、童子切安綱と並び称されて「日本刀の東西の両横綱」と例えられることもある刀だ。

俺の祖父が氣に行ったとか言って買い取った。（矢吹の家とは違いきちんと買い取った）

「何故ここに……」

本家に保管されていた筈だが……

それに俺は事故にあう直前にこんな物は持っていなかった筈だ。

「ふむ……む？」

悩んでいると向うから二人の女が歩いてきた。

「隠れた方が良いか」

ここがどこか分からない以上面倒なことになる可能性がある。そう思っただけの岩に身を隠す。

そして先程俺が居た場所の近くに二人の女性が現れた。

「最近いい加減に袁術に使われるのも疲れてきたわね」

袁術？確か三国志の登場人物だったな。

三国志関係の映画の撮影だろうか？

俺がそんなことを思っている間にも二人の話は続いて行く。

「そう言えば策殿、こんな占いを知っておるか？」

さく？サク？もしかして策か？ならばあの女性は孫策か。
ということはもう一人の女性が黄蓋か周瑜だろうか？

「何々？」

「天の御遣いが黒点を切り裂き流星に乗って現れる天の御遣いがこの大陸の乱世を鎮めると言う占いじゃ」

む？三国志や三国志演義にそんな者は登場していなかった筈だが？
それに今気付いたが孫策は男の筈だ。
なのに策殿と呼ばれているのは女性……もう少し様子を見るか。

「まあ、そんな話でも私達の独立の切欠になってくれたら嬉しいんだけどね」

もし、本当にこの時代が三国志の時代ならば神を恨むしかないだろう。

だが、今更恨んでも遅いだろう。

「ぐっ！」

少し動いた所為で身体中に痛みが走った。

その所為で少し声が出てしまった。
その声が聞こえていたらしい。
孫策らしき女が剣を抜いて叫んだ。

「誰！？」

俺は仕方なく岩の後から出る。

「あなた誰？」

このままで俺の命が危ない。
そう思った俺は大包平を抜いて構える。
それを見た孫策らしき女性も剣を構えた。

「祭、この子相当やる子よ。
手は出さないで」

「承知……」

そう返事をして祭と呼ばれた女性は孫策らしき女性から少し離れた。
俺はそれを見て孫策らしき女性に襲い掛る。

「くっ！」

ガキンッ！

孫策らしき女性は何とかそれを防ぐ。
俺は孫策らしき女性から少し距離をとる。

「っ！」

全身に痛みが走り俺は立てなくなった。
ここまでか……

だが、女性俺に斬りかかって来ない。

「あなた、怪我をしてるの？」

「ああ、高い所から落ちたのか全身ボロボロだ」

お互いに警戒しながら喋る。

立てなくなったとは言え刀を振るくらいは出来る筈だ。

そんなことを思っていると女性が剣を鞘にしまいこ言った。

「あなた『天の御遣い』を演じない？」

「は？」

孫策の城の一室

「大体の事情は把握した」

簡単にまとめればこうなる。

孫策の母親は戦で死に彼女達は力を失った。

そして今は袁術の客将として伏する龍として天に飛ぶ時を待っているらしい。

そんな時管輅が『天の御遣いが乱世を鎮める』と言う占いをしたらしい。

「俺が生きていくにはどうやらその天の御遣いを演じなくてはいけないだろう」

この大陸で生きていく術は俺には無い。
だからこそ受けた方が良い。

「なら？」

「ああ、天の御遣いを演じる。
それより今日はもう寝て良いか？
正直こうやって喋っていることが辛いんだ」

さつき刀を振っていたがそれは気力で頑張っていた。
寝れるならば寝るに限る。

「良いわよ。」

その代り明日は尋問があるからね」

「ああ、構わない」

俺はそう返事をして目を瞑り意識を手放した。

十話 それぞれの道へ（終夜編）（後書き）

流石に短いので修正しました。

十一話 尋問（前書き）

こんにちわ

今回は台詞が多いです。

地の文が少ないです。

本当にごめんなさい……

では、始まり

十一話 尋問

俺は今尋問をされる為中庭に居る。

中庭で行う理由は恐らく盗み聞きをしている奴が良く見えるからだろ。

まあ、それ程あいつ等も大変だと言うことが……

そんなことを考えていると孫策と黄蓋が二人の女性を連れて来た。

一人は呑気そうで良く分らん女性。

もう一人は…… なっ！

「ほう……りん……？」

俺はそう呟いて首を横に振る。

いくら似ていても彼女じゃない。

彼女な訳が無いんだ。

俺がそんなことを考えていると孫策が手を振って来た。

俺も一応手を振り返す。

「もう怪我は大丈夫？」

「一日やそこらでは治る怪我で無い。

昨日よりはまだマシだがな」

「そう、それより紹介するわね。

あなたの尋問を担当する陸孫と周瑜よ」

「よろしくお願いします」

何だか呑気な声だな。

これが本当にあの有名な軍師か？

「周瑜だ、よろしく頼む」

あ的美周郎か。
成程。

「潺せせい終夜だ。」

お前達への協力は惜しまない。
よろしく頼む」

「それも尋問しだいだがな」

確かに生き残れるか首を刎ねられるかは俺次第だろう。
だが

「生き残れるさ。」

俺にはその自信がある」

「ほう？ならばその根拠を教えてもらおうか」

俺は周瑜に言われ生き残れる根拠を話し始める。

「お前達は袁術から独立したいと思っているだろう？

その為には力が欲しい筈だ。

無論俺を妖として斬り捨てて名誉を上げるのも良いだろう。

だが、例えそれをしたとしても袁術がお前達の領土を返還する筈が
無い。

お前達を利用し尽くすだけだ。

もし袁術を倒して独立出来たとしても乱世の中でお前達が生き残れ

るかどうかは分からない。

ならば、怪我をしながらも孫策とやり合えた俺を仲間にして確立を少しでも上げた方が良く筈だ。

何せ天の御遣いとか言うのはあと二人居る筈だからな」

「何だと？」

「天の国で俺が消えた状況下ではもう二人仲間が居たんだ。だから、あいつ等もこちらに来ていると思っただ方が良く。それに天の国と言うのはこの時代から千年後以上も先の世界だ。だからこれからどうなるかと言うのは知っている」

「何と……では、後の二人も？」

「ああ、だからお前達は簡単に倒せる」

俺がそう言うのと周瑜は思案顔になった。
そしてしばらくして

「分かった。

完全には信用できないが私達はお前を利用しよう」

「良いさ。俺もお前達を利用する。
生きる為にな」

俺がそう言って笑うと周瑜も少し笑った。
すると

「ねえ、終わった？」

「長つたるしい尋問は終わつたか？」

孫策と黄蓋が酒を飲んでいた。
陸孫は引き攣った笑みを浮かべている。

「周瑜……」

「何だ？ 潺」

「お前も苦勞しているんだな」

「……分かつてくれるか」

「ああ」

昔不良に絡まれた時に一刀と矢吹は不良の悪口を言つて不良を刺激した。

その時結局は俺達は戦うことになり警察に連行された。

「少し苦勞している同士話さないか？」

「そうだな……」

その後俺と周瑜の間に『苦勞人同盟』が結ばれたのは余談である。

十二話 黄巾党に対する会議（前書き）

すみません……今回も短いです……

十二話 黄巾党に対する会議

今俺は周瑜に呼ばれ中庭に来ている。

秘密の軍議ならばどこか人気の無い部屋でやれば良いだろうと思っ
たが

どこかで袁術の目が光っているんだろう。

確かにここならば盗み聞きしている奴が良く見えそうだ。

因みに孫策は袁術に呼ばれここには居ない。

「現在、荊州で暴れている黄巾党は北の本隊と南の分隊の二つだ。
兵も金も兵糧も無い我々とすれば、南の分隊にあたりたい所だが袁
術のことだ、本隊に当たれと言ってくるだろう。
そこで……潺、お前の意見を聞かせて欲しい」

「いきなりだな」

まあ、協力を惜しまないと言ったから協力はするがな。

「ふむ……袁術に兵をと金と兵糧を出させれば良いだろう?」

「「「は?」「」」

そこでその反応をするか。

まあ、しょうがないことだがな。

俺はそう思いながら説明を始める。

「まず袁術に本隊と当たる代わりに兵と金と兵糧を出せと交渉する。
それが駄目ならば袁術よりも早く南の分隊を撃破する。
そうすれば太守としての面子がある袁術は本隊を相手にすることに

なる」

俺はある程度説明し終わり茶を啜る。

……日本茶が懐かしくなった。

「…………誰かある！」

俺が茶を飲んでいると黄蓋が兵を呼んだ。
どうやら採用と言っことらしい。

「はっ！」

「策殿に伝令を放て、手紙の内容は

」

黄蓋が兵士に指示を出している間周瑜が俺を見ているのに気付いた。
何だろうと疑問に思い尋ねてみる。

「何で俺を見ている？」

「いや、良い拾い物をしたなと思ってな」

まさか、物扱いされるとは……心外だ。

「潺、お前、武はどれ程だ？」

「化け物二人とつるんでいるからな。
それなりにはある」

あの化け物二人と付き合っていると否応にも強くなってしまった。
あの二人と互角に渡り合える俺も化け物なのだろうか？

「そうか……ならばお前にはいつか部隊を預けたいな」

「名前だけだが天の御遣いが率いる部隊か……庶民が食い付きそうなネタだ」

こいつは思ったより性格が悪いかもしれない。

そんなことを思っていると黄蓋が兵に指示を出すのを終えていた。

「さて、具体的な戦術だが……簡単だ。

圧倒的な戦力の差を覆すことができて更にこちらに被害が少ない戦略が一つある」

「そんな便利な策ってありますか？」

「あるぞ。人として考えさせられる策だが……盗賊相手には遠慮は要らないだろう」

「そうだな、それで？その策とは？」

俺は残っている茶を飲んでこう言った。

「火を使うんだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4104x/>

三人の天の御遣い・改

2011年11月26日21時50分発行